

自著紹介②

『イギリス都市文化と教育－ウォリントン・アカデミーの教育社会史』昭和堂、2012年

三時眞貴子（広島大学）

本書は、これまで教育学的意義や教育史における意味を問う研究、科学的知識との関連あるいは非国教徒の歴史の中で取り上げられてきたウォリントン・アカデミー（1757-1786）を18世紀イギリス都市文化の中に位置づけて検討したものである。

都市文化の中に位置づけることは、すなわち都市社会と教育の関連を問うことにもなる。その意味で本書は教育と社会の関係を再検討する研究ともいえる。とはいうものの、教育の社会的機能を問うことを主題にしているわけではない。本書はむしろ教育の結果から導き出される機能よりも、人々が教育をどのように認識し、利用したのかという点に重点を置いている。教育現場を社会的、文化的文脈に位置づけ、実際にその教育を受けた被教育者だけでなく、教師、保護者、学校管理者、行政、地域の人々など、さまざまな立場の人間にとっての教育の意味や、彼らがどのように教育現場に関与したのかを実証的に明らかにすること、それが本書のねらいである。

そのための研究手法として、「プロソポグラフィ」を用いた。「プロソポグラフィ」は歴史上の特定のグループに所属する者たちの社会的位置や経歴、家族関係などを具体的に調査する研究手法であり、集積された調査結果から彼らの人間関係や社会的背景の特徴などを明らかにできる。調査に用いた史資料は、アカデミーの出身者名簿を基本として、人名事典、自伝や伝記、弔辞、アカデミー関係者が著した論文やパンフレット、マンチェスターのグラマー・スクールの生徒一覧、オクスフォード・ケインブリッジ大学の学位取得者名簿、各種任意団体や教会理事の名簿、18世紀に出版された都市人名住所録である。その結果、アカデミーの役員・理事・保護者・学生の多くが都市の多様な場面で主導的に活躍する都市エリートであったことや、彼らの宗教上のつながり、血縁関係、多様な活動を行っていた組織への所属など、彼らを結ぶ重層的な人的ネットワークが浮かび上がった。さらにアカデミーの理事会の報告書・議事録等の史料と合わせて分析した結果、都市エリートである彼らが求めた教育の姿と学生像が浮かび上がった。

二番目の本書の特徴は、従来、非国教徒と国教徒の対立軸のひとつとして描かれてきたウォリントン・アカデミーを都市文化のなかに位置づけて検討することで、二項対立図式から脱却する必要性を示したことである。利用者である保護者と学生からしてみれば、ウォリントン・アカデミーもグラマー・スクールおよびオクスブリッジも選択肢の一つであったことが明らかとなり、実際に多くの生徒がグラマー・スクールからウォリントン・アカデミーへ、そしてウォリントン・アカデミーからオクスブリッジへと進学していることが判った。「利用の仕方」に着目することで、学校の成り立ちや教師の宗教上の背景からだけでは見えてこない側面を明らかにしたことは、ひとつの意義と捉えることができよう。

都市文化の中に位置づけることで浮かび上がったもう一つの特徴は、ウォリントン・アカデミーが任意団体として設立された点に注目できたことである。それは「教育機関」としてのアカデミーを示すと同時に、都市エリートが活動する場としてのアカデミーの姿を浮かび上がらせることになった。都市エリートたちは「自由」「平等」「パブリック」などの言葉を用いて、自らの活動の正当性と重要性を訴えた。それは「抑圧された非国教徒による抵抗・格闘の証」というよりもむしろ、都市社会で生き抜くための作法であり、彼らの「生き方」を示していた。

本書は、教育学と歴史学（近代史・科学史）の最新の研究成果を取り入れつつ、一次史料を用いて検討したものである。もちろんそのためには多くの方々との議論・交流が不可欠であった。筆者の力不足でそれぞれの学問領域にどれだけ貢献できたかは定かではないし、重要な論点を捉えきれない点も多々ある。しかしながら学問領域の「常識」を超えて「学際的」であろうとした奮闘の結果であると捉えていただければ本望である。この点も本書の特徴の一つと言えるのではないかと考えている。有り難いことに科学史・教育史・歴史学それぞれの雑誌で書評を書いていただいている。それぞれの領域で出される批判・指摘をしっかりと受け止め、今後の研究に生かしていきたい。なお拙著は、筆者が2010年に提出した博士論文に大幅な加筆修正を加えたものである。